

旧山岳博物館の収蔵品

－登山靴篇－

日本に登山靴が伝わったのは、明治期に欧米の近代登山が紹介された頃だとされています。当時の日本では、まだ草鞋わらじが主流でした。

日本で登山靴が広まるきっかけとなったのは、1921（大正10）年に楨有恒まきありつねがアイガー東山稜さんりょうの初登攀はつとうはんに成功して帰国したことや、同年に大阪のマリヤ運動靴店が登山靴の輸入販売を開始したことによると考えられています。

当時の登山靴は大きく二種類に分けられました。一つは靴底に鋏を打った「鋏底靴」、もう一つはゴム底を縫い付けた「ゴム底靴」です。

鋏底靴には、クリンカー、ムガー、トリコニーなど、形状の異なる鋏が用いられていました。一方、ゴム底靴には、イタリアで開発されたゴム底「ビブラム」を貼り付けたり、ビスで固定したりしたものがありませんでした。ビブラムはもともと商品名でしたが、やがてゴム底の代名詞として広く用いられるようになります。